

ステツキ

寺田寅彦

青空文庫

初めは四本足、次に二本足、最後に三本足で歩くものは何かというなぞの発明された時代には、今のように若い者がステッキなどついて歩く習慣はなかったものと思われる。杖つえがつきものになっていて魔法使いはたいていばあさんかじいさんであるが、しかし彼らの杖はだいぶ使用の目的が違っていて、孫悟そんごくう空のなんとか棒と同様にきわめて精巧な科学的内容をもっていたものと思われる。シナの仙せん人にんの持っていた杖は道術にも使われたであろうが、山歩きに必要な金剛こんごうづえ杖の役にも立ったであろう。羊飼いは子供でも長い杖を持っているが、あれはなんの用にたつものか自分は知らない。牧羊者の祖先が山地の住民であつたためか、それとも羊を追ひ回しおおかみでも追ひ払うために使われたものか、ともかくもいわゆるステッキとはだいぶちがつたものである。それから雲助の息杖いきづえというものがある、あれの使用法などは研究してみたらだいぶおもしろそうなものであるが、今日では芝居か映画のほかには山中へ行かなければ容易に見られないものになった。あれも現代におけるステッキの概念にはあてはまらないもので、昔の交通機関としての山駕籠やまかごという機械の部分品と考えるべきものであろう。

自分たちの子供の時分には、田舎いなかのおばあさんというものは、大概腰のところでからだ

が百二十度ないし九十度ぐらいに折れ曲がっていたもので、歩くにはどうしても杖を第三の足にしないと重力に対するつりあいがとれなかったものである。実に悲惨な格好をしていたものであった。木枯らしの吹くたそがれ時などに背中へ小さなふろしき包みなど背負つてとぼとぼ野道を歩いている姿を見ると、ひどく感傷的になつてわあつと泣き出したような気持ちになつたものである。もういつそう悲惨なのは田んぼ道のそばの小みぞの中をじゃぶじゃぶ歩きながら枯れ木のような足に吸いついた蛭ひるを取つては小さなもめんの袋へ入れているそういうばあさんであつた。こうして採集した蛭を売つて二銭三銭の生活費をかせいでいたのである。思い出すだけでも世界が暗くなるくらいで、杖つえという杖の中でもこういうばあさんの杖などは最もみじめな杖であろう。

親類のじいさんで中ちゆうぶう風ふうをしてから十年も生きていたのがあつた。それが寒い時候にはいつでも袖無しそでなの道服を着て庭ひなたの椅子いすに腰をかけていながら片手に長い杖を布切れで巻いたのを持って、そうしていつまでもじつとしたままで小半日ぐらいのあいだ坊主頭を日に照らしていた。あたまの上にはたいてい蠅はえが一匹ぐらいとまっていた。そういう夢のような幼時の記憶があるが、このように腰をかけながらついている杖などは杖としての珍しい用途であろう。力学的に考えるとやはりからだの安定を保つために必要な支柱の

役をしていたに相違ない。

しかしこういうあらゆる杖に比べると、いわゆるステッキほどわけのわからない品物はないと思われる。屈強の青壮年が体重をささえるために支柱とするはずはないからである。もつとも銀座アルプスのデパートの階段などを上る時は多少の助けになるかもしれないが、そういう時でも彼らは必ずしもステッキの先端を床に触れているとは限らないのである。

西洋でいつのころから今のようなステッキが行なわれたものか知らないが、ロココの時代には貴婦人がたがりボン付きの長い杖についている絵がある。またそのころのやさ男が粉をふりかけた鬢かづらのしつぽをリボンで結んで、細身のステッキを小脇こわきにかかえ込んで胸をそらして澄ましている木版絵などもある。とにかくあのころ以後はずつと行なわれて今日に至ったものであろう。いずれにしても人間がみんな働くのに忙しくて両方の手がいともふさがっているような時代には全然用のないものであったに相違ない。人間の社会生活が進歩した結果として、何もしないで楽に遊んでいられる人間が多数に存在するようになる、今まで使っていた手が暇になつて、全く言葉どおりに手持ちぶさたを感じる。そうかといって太平のシャンゼリゼーの大通りやボアの小道を散歩するのに、まさか弓矢や人殺し用の棍棒こんぼうや台所用のパン棒を携えるわけにも行かないから、その代わりに何かし

ら手ごろな棒きれを持つことになったのではないかと想像される。とにかく昔のシナでは杖つえの字は「持」の字と同じで手に持つものならなんでも「杖」であつたらしい。

しかし、太平の世の中でもまれには都大路に白昼追いはぎが出たり、少し貸してくれな
どという相手も出現するから、そういう時にはこれがたちまちにして原始民時代の武器と
して甦生そせいするという可能性も備えているのである。実際自分らの子供の時分に自由党のけ
んかの頻繁ひんぱんであつたころは鋏くわの柄をかつぎ回つたりまたいわゆる仕込み杖という物騒な
ステッキを持ち歩くことが流行して、ついには子供用のおもちやの仕込み杖さえできてい
たくらいである。西洋でも映画「三文オペラ」の親方マツキ・メツサーがやはり仕込み杖
を持つているのである。

とにかく、他に実務的な携帯品があつたのでは、せっかくのステッキもただのじじむさ
い杖になつてしまう。よごれた折り鞆かばんなどを片手にぶらさげてはいけけないのである。やは
り全く遊ぶよりほかに用のない人がステッキ、そうしてステッキだけをかかえていないと
板につかないようである。ゴルフのなんとかいうあの棒などもそうである。歴史は繰り返
すとすれば今に貴婦人たちやモガたちが等身大のリボン付きのステッキにハンドバッグで
もつるしたのを持つて銀座を歩くようになるとおもしろい見物みものであろう。

ついでながら、桿^{かん}状^{じょう}菌^{きん}バクテリアの語源がギリシア語のステツキであるのはちよつとおもしろい。病魔のステツキが体内をあばれ回るのである。

日本で製造して売っている金具付きのステツキはみんな少し使っていると金具がもげたり、はじけたり、へこんだりしてためである。ここ数年来の経験でこの事実を確かめることができた。もつともステツキに限らず大概の国産商品がそうであり、ちゃんとした器械類でさえも長持ちのするのは珍しい。ステツキが用のない人のぜいたく品ならば、なるべく早くいけなくなつて、始終新しく取り換えるほうがいいかもしれない。実際新しいステツキを買うとあと一週間ぐらゐは勉強ができるという人もいるくらいである。しかし国産の時計や呼び鈴などのすぐ悪くなるのは全く始末が悪く日本の名誉のために情けなくなる。

年を取るとやはり杖^{つえ}が役に立つ。毎日あがる階段で杖の役に立つ程度によつてその日のからだのぐあいのよしあしがわかる。健康のバロメーターになる。字引きで見ると杖の字は昔は尺度の意味であつたという話があるから、昔もやはりメーターの一種であつたのである。

(昭和七年十一月、週刊朝日)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第六卷」岩波書店

1961（昭和36）年3月7日第1刷発行

初出：「週刊朝日」

1932（昭和7）年11月号

入力：Cyobirin

校正：佳代子

2003年10月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ステッキ

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>